

第 14 章

工業標準化におけるリーダーシップ

工業標準化の分野での石川 馨先生のご業績は、第 13 章 3 節に述べたサンプリング法に関する規格作成に加えて、本章で述べるように、その貢献するところは極めて多岐にわたり、しかも何れにおいても大変内容の濃いものです。

人によっては、先生の品質管理(QC サークルを含む)ならびにサンプリングにおけるご活動は工業標準化に対するご貢献とは異質なものとお考えの方もいるかも知れません。しかし、先生のお考えとしては、次のようなことから、同じ傘の下の活動と考えられていたのではないかと思います。

(1) 工業標準化は、規格*を制定し、実施するための活動であり、その活動内容としては、規格の制定、教育・普及、実施(認証を含む)等の諸活動からなります。また、規格は、各会社で制定する社内規格、国レベルで制定する国家規格、国際的レベルで制定する国際規格に区分できます。この内、社内規格の制定・実施に関しましては、各社において、品質管理の名のもとに、進められることが普通ですが、国家規格、国際規格の制定・実施に際しては、社内規格とは違った厳格な制度のもとに広い範囲のコンセンサス作りと普及・教育が必要とされます。工業標準化は、良い品質の製品を生産するための活動としての品質管理のインフラストラクチャ作りともいえるべき活動であり、品質管理とは切っても切れ

* 英語の standard の訳語であり、ときには標準という用語も使われ、その使い分けは明確になっておりません。本章では、慣用に従って使い分けしましたが、実質的意味は同義とお考え頂いて結構です。(第 7 章 1 節参照)

ない関係にあります。大変な労力と忍耐を要する割には地味な活動と思われがちです。しかしながら、石川先生は、品質管理を徹底するためには、単に社内規格レベルでは不十分であり、国家規格、さらには国際規格まで合理的なものにしなければならないという崇高な信念のもとに、この活動にご尽力されたものと思われま。

(2) 先生の学術研究である粉塊混合物のサンプリングに関するご研究の成果を実際の場で活用させるためには、国家規格、国際規格としてその成果を採用させる必要があるというお考えがあったことも見逃せない点であります。多くの学者は、自分の役割は、研究のみにあると考えて、その成果の利用に関しては、コミットしないケースが多い中で、研究成果は実際に使われてはじめて研究が完了したことになるという先生のご信念が、この活動に対するより一層の推進力になったものと思われま。

(3) (2)と同じ観点で、統計的方法ならびに品質管理関連のご研究のJIS化に關してもご尽力されました。

石川先生の工業標準化におけるご業績は、大別いたしますと、次のようになります。

(社内規格レベル)

1) 社内規格についての研究

(国家規格レベル)

2) 日本工業規格(JIS)の作成

① 品質管理関係

② サンプリング関係

3) JIS全般についての規程内容の改善のための研究

4) 国家規格ならびに標準化全般にわたる普及・教育セミナー、大会、出版、品質月間等

(国際規格レベル)

5) ISO運営面への直接参加

① ISO理事会ならびに執行委員会(現執行評議会)メンバー

② 日本工業標準調査会ISO部会長

6) 国際規格原案の作成

- ① 品質管理ならびに統計的方法(ISO TC 69)
- ② サンプルング関係(ISO TC 102)

7) 国際標準化をめぐる国際交流・国際協調

- ① 太平洋地域標準化会議(PASC)
- ② 二国間交流—対ソ連, 対中国

8) 開発途上国に対する国際協力, 国際協力事業団集団研修コース

わが国における工業標準化は, 日本工業標準調査会(JISC:事務局は通産省工業技術院標準部)のイニシアチブのもとに進められており, 基礎的・共通的分野での具体的な活動は, 標準部の指導の下に, (財)日本規格協会によって推進されております。従って, 石川先生の工業標準化の分野での活動は, JISC や同協会の活動を通して行われました。

本章においては, 上記の活動の内, 1)と4)につきましては, 14.1「日本規格協会におけるご功績」として記述いたします。また, 2)と3)につきましては, 14.2「日本工業規格(JIS)の作成ならびに合理化への貢献」として, 5)から8)につきましては, 14.3「国際標準化活動へのインパクト」として記述いたします。また, 2)と5)の内サンプルング関係につきましては前章13.3にまとめて記述いたしました。

なお, 石川先生のこのような多面的なご業績を称えるために, 1969年に通商産業大臣表彰が行われ, 1977年には藍綬褒章が授与されています。また, 著作「社内規格作成上の要点」(雑誌『品質管理』, 1957年), 『日本工業規格について』(日本規格協会, 1962年), 『製品規格のあり方・作り方』(日本規格協会, 1968年)に対し, いずれも日本規格協会から標準化文献賞が授与されております。

14.1 日本規格協会におけるご功績

(1) COSCO(管理方式研究会)でのご活躍

日本の産業の実情に即した品質管理方式の研究を目的として, 1950年に品質

管理方式研究委員会(現、管理方式研究会：略称 COSCO)を設置して以来、運営委員、規格部会長、国際部会長として研究会の運営に当たられました。同時に分科会の主査として、特定のテーマについての研究を指導されました。

1960年から1972年までにCOSCO抜取検査部会規格合理化分科会の主査として、JISにおける製品規格のあり方を品質管理の立場から研究して、その合理化に貢献されました。その内容につきましては、本章2節2項に述べます。

この規格合理化分科会は、引き続き社内標準としての製品規格のあり方についての研究を行い、『製品規格のあり方・作り方』をまとめられ、1968年に日本規格協会の標準化文献賞を受賞されております。

1962年から1971年までCOSCO規格部会長として、部会内の各分科会における品質管理関係JISの原案作成を統括されました。先生が部会長や委員として関係された品質管理関係のJIS原案は、JIS Z 8101品質管理用語をはじめ34規格に及びます。(品質管理関係JISは全部で37規格)

1971年からは新設された国際部会長に就任され、ISO/TC 69(Application of Statistical Methods)に関する国内委員会を直接指導されました(本章3節1項参照)。

(2) 品質管理と標準化の全国大会へのご協力

1958年から開催している標準化全国大会の第20回(1977年)と第22回(1979年)の大会実行委員長を務められたほか、特別講演を数多くされています。また、1967年には、品質管理と標準化の普及をはかることを目的とした「品質管理と標準化全国大会」(略称：Q-S全国大会)が開始されましたが、その実行委員として、大会プログラムの作成など、大会の運営にご貢献をいただきました。

(3) セミナーへのご協力

技術スタッフを対象とした品質管理教育コースとして「品質管理と標準化セミナー」を1953年に開講しました。先生は、教務主任の一人として、このセミナーの企画・運営に当たられると同時に、講義も担当され受講生を直接指導されました。このセミナーは今日では東京をはじめ日本国内にある七つの支部所

在地で開催されており、日本規格協会における QC 教育の中核として、1991 年現在で修了生は約 3 万 8000 名に達しています。

部課長対象の QC 教育を進めるために、1956 年に COSCO 実施部会ガイドブック作成分科会が設置され、先生は山口 襄主査を助けて部課長のための手引き『品質管理ガイドブック(上), (下)』を、日本規格協会から出版されました。これをテキストとし、1959 年に合宿教育による「部課長のための品質管理講座」が開講されましたが、先生は中心講師として指導に当たられました。1991 年末現在で 127 コースを開催し、修了生は約 7700 名に達しています。

(川村正信, 日本規格協会理事)

セミナー事務局としての思い出

高見澤 茂

石川先生に初めてお会いする機会を得ましたのは、今から約 30 年前の 1960~61 年だったと思います。私は当時、技術部品質管理課(現管理技術センター)で品質管理と標準化セミナーの事務局を担当しておりました。

ある日のこと、先生のご講義は普通科コースの、確か $\bar{x}-R$ 管理図の作り方でした。実験用具のチップを用いながらデータを記入、そしてグラフ用紙にプロットしてゆく、それは先生のユーモアたっぷりの楽しいご講義でした。ご講義が終わり全員に提出してもらうため回収したところ、「高見澤君、事務局も勉強の意味で、皆さんの書いたものを添削してみてもどうかね。できれば〇日までに自宅へ郵送してくれないか」とのことです。

私は初めてのことであり、大変びっくりしました。当時、職場の先輩に色々聞きながら、深夜までかかり添削を済ませ、納期どおりに先生のところへお届けしました。それから 2, 3 日後、先生からお電話でお誉めの言葉を頂きましたが、その時「君のが出ていないよ」と言われるのです。事務局は出さなくてもと喉まで声が出るころでしたが、幸いにも後部の座席でご講義を拝聴し

ておりましたのでデータの記録はあり、後日提出した次第です。

今思いますと「事務局も一緒に勉強なさい」という、大変温かく、おもしろいのある先生でした。

また、1987年の秋、ISO 総会・理事会がスイスのジュネーブで開催された折、先生とご一緒する機会を得ました(日本からは石川先生、今泉先生をはじめ数人の方が出席されました)。

成田を出発後、途中給油のためアンカレッジ空港に寄港した際に、少し時間があるので、空港ロビーにありましたところ、先生が気軽にお声をかけて下さり色々ガイドを頂きました。また先生は鞆からカメラを出され、アンカレッジ空港をバックに私の写真まで撮って下さいました。ジュネーブ到着後も何回か写真を撮って頂きましたが、帰国後1週間くらいたった頃かと思いますが、先生からお手紙が送られてきました。封を切って中を拝見すると、多くの写真と共に数枚の小封筒が同封されており、それぞれにお渡しする方の名前が丁寧に書かれてあるのです。日頃大変お忙しいのに、いつ、どうしてこのようなことができるのでしょうか。私は、心温まる優しいお人柄に感銘を受けました。謹んで石川先生のご冥福をお祈り申し上げます。

(日本規格協会総務部長)

(4) 品質月間でのリーダーシップ

1960年以降、全国レベルでの品質管理の普及をはかる目的で、11月に当協会、日科技連および日本商工会議所の共催による「品質月間」行事を実施して以来、品質月間委員会委員長として貢献されました。日本規格協会は、月間テキスト、物品(標語など)の販売、地方講演会の開催を担当しておりますが、先生は、品質月間委員会委員長として毎年講演を引き受けられ、特に東京から離れた地域の講演を進んで担当されました。(第8章6節参照)

(5) 品質管理・標準化関連図書の出版

当協会から次の著書を発行されました。

1958『品質管理ガイドブック(上)』

- 1958『品質管理ガイドブック(下)』
- 1968『製品規格のあり方・作り方』
- 1968『管理図』
- 1977『新版品質管理便覧』
- 1988『新版品質管理便覧(第2版)』

14.2 日本工業規格(JIS)の作成ならびに合理化へのご貢献

COSCO 等で作成された JIS 原案は、日本工業標準調査会(JISC)の専門委員会と基本部会において、国としての審議が行われた上で JIS として制定されますが、石川先生は、1952 年から JISC の臨時委員として品質管理関係の JIS の審議に当たられ、さらに、1963 年からは JISC の基本部会の委員として品質管理関係の規格を含む広範囲の基本的な JIS の制定に貢献されました。

また、1978 年には、通産省農業機械標準化政策委員会委員長に任じられ、各メーカーから製造販売されている農機具の部品の標準化をはかり、その合理化にも尽力されました。また、同年には、工業標準化制度改正審議特別委員会委員にも任命されています。

(1) JIS の作成—特に品質管理の JIS

現在(1992 年 1 月)制定されている品質管理関係の JIS は、下記に示す 5 カテゴリーで 37 規格ありますが、これらの規格原案のほとんどは、日本規格協会 COSCO の種々の部会あるいは分科会でその作成と審議が行われました。石川先生は、研究会発足の初期の段階から、COSCO に参加され、これらの規格原案のほとんどについて、その作成に直接参画されるか、あるいは高所からのご指導に当たられました。これらの品質管理関係の JIS は、1949 年の JIS マーク表示制度の発足と併せて、わが国における QC 活動の普及・発展に、そして工業製品の品質向上に大きく貢献してきました。

JIS Z 8101(品質管理用語)等の用語規格 3/3 件(信頼性用語等の関連分野のものを含む)

JIS Z 9001(抜取検査通則)等の抜取検査法の規格 10/12 件

JIS Z 9021(管理図法)等の管理図法の規格 2/3 件

JIS Z 9041(測定値の処理方法)のデータ処理の規格 1/1 件

JIS Z 9042(母平均と基準値の差の検定)等の統計的推定・検定の規格 18/18 件

注) 上記の各カテゴリ別の右側に示してある分数は、分母の件数が制定されている規格数、分子が石川先生が関係された規格数を意味する。

サンプリング関係ならびに分析試験許容差通則の JIS 作成につきましては、第 13 章を参照下さい。

(2) JIS の合理化

石川先生は、JIS の作成に加えて、「JIS のあり方」についての研究もなされ、その成果は現在の JIS の規定内容に多大な影響を与えています。

「規格を見たらいいかげんと思え」、「JIS を見たらいいかげんと思え」が先生の語録の一つでありました。先生は、このような批判を根拠なしにされていた訳ではなく、科学的な立場から行った JIS についての調査結果から発言をされていました。さらに、その改善方法についても提案をして来られました。本章 1 節で述べましたように、日本規格協会 COSCO の中に規格合理化分科会を設置し、主査として次のような研究を進めてこられました。

既存の JIS の A 部門から Z 部門の全ての品質規格を対象とし、サンプリングによって抜き取った JIS について、その規定の内容を徹底的に分析し、問題点を抽出されました。さらに、JIS を使う際の実際上の問題点も抽出、検討されました。

その結果、浮かび上がってきた問題点を次のように集約されました。

- ・実際に用いられていない JIS が相当多い。
- ・全項目が合理的にできている JIS はほとんどない。
- ・JIS 全体として標準化が行われていない。

分科会は、これを出発点として各規格の規程項目および内容はどうかの検討を行い、その成果を報告書にまとめました。このための審議期間は 5 年間、会合回数は 57 回におよび、審議のための資料、議事録も膨大な量となり

ました。

先生は、これを JIS の審議機関である日本工業標準調査会へ、意見書として提出するお考えでしたが、報告書前半の JIS の問題点を指摘した部分だけが一人歩きすることを当局が心配した結果、このお考えは実現せずに、結局は「日本工業規格について」という抽象的な表題の改善提案書(80 ページ)として、研究会のメンバーのみに配布するにとどめました。

しかし、その後日本工業標準調査会の中に特別委員会が設置され、この成果に基づいて JIS の品質規格のあり方が検討され、1964 年に『日本工業規格における製品規格のまとめ方』としてまとめられました。これは現在 JIS Z 8301(規格表の様式)に参考として掲載され、JIS の規定内容の合理化に影響を与えています。『日本工業規格について』は、1962 年に日本規格協会の標準化文献賞を受賞しました。

さらに、この研究に参加した大学、企業、官公庁などからの委員の中から、その後、QC の普及・推進に活躍する方が輩出したこともこの分科会の成果として特記すべきことでしょう。毎月開催された委員会での審議や年 1 回の合宿は、さながら石川道場ともいえるべき雰囲気でありました。 (川村正信)

石川先生を偲ぶ

川 村 正 信

先生が主査をしておられた規格合理化分科会の事務局を命ぜられたのは1956年でありました。そしてこの分科会と、事務局としての仕事は、最も密度濃く先生にご指導いただく私の道場となりました。

まず最初のご指導は「議事録は詳しく書け」でした。テープレコーダの使えない頃でしたから、委員会中は常に精神集中が必要でした。特に困ったのは先生の発言、とりわけ語尾の聞き取りで、暫くの間は先生の発言を推測するのに時間が必要でした。その後あまり苦勞なく聞き取れるようになったのは、耳の慣れよりも推測の作業によって、先生の考え方やQC的考え方がわかってきたという理由のほうが大きかったと思っています。

「原稿が集まらないのは事務局が悪い」も私の石川格言となっています。先生ご自身は必ず期限前に原稿を提出されるのですが、そうされない方々もおられました。そして委員会審議に絶対必要だと事務局自身が思って行動すれば、必ず原稿は集められることを確信できるようになりました。

「酒が飲めなくてQCができるか」も先生の口癖でした。当時あまり飲めなかった私も、やがて先生のお相手ができるまでに進歩しました。酒を飲みながら多くのことを教えていただいたし、「貴様ももっとしっかりしろ」と激励(と勝手に思っていた)の言葉を常にいただきました。

この分科会の成果である『日本工業規格について』と『製品規格のあり方・使い方』が標準化文献賞を受賞した喜びを思い出し、酒を飲めるようになったがQCのできない自分を反省しつつ、先生のご冥福を心からお祈りしております。

(日本規格協会理事)

14.3 国際標準化活動へのインパクト

国際標準化機構(International Organization for Standardization:ISO)は、国際電気標準会議(International Electrotechnical Commission:IEC)とともに、国際規格の作成を行っており、貿易が世界的に拡大するのにもない、この国際規格の重要性はますます大きくなってきております。石川先生は、この国際標準化機構(ISO)に関連して、次のような貢献をされました。

- 1) 1963年から日本工業標準調査会 ISO 部会委員、1977年からご逝去されるまで同部会長を務められ、ISO に対する日本の政策決定に参画され、貢献をされました。
- 2) 1971年から ISO/TC 69(統計的方法の適用)国内対策委員会委員長として、品質管理を含む統計的方法の国際規格原案の作成・審議に貢献されました。
- 3) 鉄鉱石などのサンプリングの分野(ISO/TC 102)でも、国際規格の作成に大きな貢献をされました。(第13章4節参照)
- 4) 1979年からは、日本代表として ISO 理事会メンバー、1981年からは ISO の執行委員会のメンバーに任ぜられ、専門分野ばかりでなく、ISO 全体の運営にも、幅広く貢献されました。
- 5) 品質保証システムに関する国際規格である ISO 9000 シリーズの作成を行った ISO/TC 176(品質保証)の国内対策委員会の発足にご尽力されました。

ISO を通じての貢献に加えて、1978年から太平洋地域標準会議(略称:PASC)の国内対策委員会委員長として、意見の提出、各国の調整などに尽力されるとともに、1981年から日中標準化交流協議会委員、1986年から国際標準化協議会副会長も務められ、国際標準化活動に貢献されました。

(富山 和, 日本規格協会 国際標準化協力センター)

石川 馨先生と国際規格の作成

Jacques F. M. Gillis

「国家規格も国際規格も品質管理の推進を目的に定められるべきである。それらの規格は参考として用いられるべきであるが、あくまでも高水準に設定されなおかつ消費者のニーズを満たす、つまり要求品質という言葉で表現される、それらの要求に到達するようあらゆる努力が結晶されたものでなければならない」

これは、石川 馨先生が、ブラジルで開催された TQC 国際セミナー、ISO/TC 102 鉄鉱石(つい 2～3 カ月程前まで私もその任務についていたのですが)で、述べられたご意見です。その ISO で、先生は私とは違う別の委員会で議長として多くの業績を残されました。先生がお話を進められるにつれて、全社品質管理についての先生のお考えの詳細が概念的に示され、その要点がはっきりとして参りました。規格はただ単に基本的な参考にすぎず、企業はその競争力を高めるためにその目標をより高度な水準に設定しなければならないということです。

私の所属する委員会の最初の会合は東京で開催され、私はそのセクレタリーを務めましたが、その会合で石川先生に再びお目にかかりました。それは 1986 年秋のことでしたが、私は偉大な先生から 2 回目のご教示を受けました。非公式な席上でしたが、先生がこうおっしゃったのを覚えております。

「……新聞記事のようではなく……正確さが規格作成の最重要点であり、どの言葉 1 つをとってみても、厳選され十分な根拠を持ったものでなければならない」

時がたつにつれ、先生が正しかったことを改めて感じております。

(ベルギー国際規格委員会 CONI 事務局長, 元 ISO/TC 102/SC 5)

(1) ISO/TC 69

ISO/TC 69(統計的方法の適用)では最初統計用語と記号の標準化を進め、1967年に推薦規格 R 645(統計用語と記号)が制定されました。1970年代に入って用語の改正作業の他、次の SC(Sub-Committee)と WG(Working Group)が設立され活動が活発化しました。

SC 1 Terminology and Symbols

SC 2 Interpretation of Statistical Data

SC 3 Application of Statistical Methods in Standardization

WG A Acceptance Sampling

WG B Application of Precision Data

後に WG A が SC 5 に、WG B が SC 6 に昇格し、新たに SC 4 Statistical Quality Control が設置されました。

これら SC および WG の設立に伴い、日本も積極的に対応する必要が生じ、1971年に日本規格協会の COSCO に国際部会が新設され、石川先生が部会長に就任されました。その後、ご逝去されるまでに 100 回以上に及んだ部会に毎回出席され、ISO の SC に対応した 6 つの分科会での検討結果の審議に指導的な役割を果たされました。

現在、16 件の ISO 規格が制定されていますが、そのうち日本が原案の作成を担当した規格が 4 件あり、その他の規格にも日本の意見が随所に採り入れられています。

先生ご自身は最初にパリの会議に出席されて以来、国内で指導に当たられ、ISO の会議には中堅、若手の委員を積極的に出席させました。これは国際標準化・品質管理の分野における国際的な人物育成を意図されていたこととと思われます。その結果、横尾恒雄氏(現日科技連嘱託)が SC 5/WG 3 の主査として活躍されたのをはじめ、宮津 隆氏(現西東京科学大学)などの委員が国際会議の場で活躍されています。1985年には東京で TC 69 の会議が開催され、海外からの 26 人を含む 42 人の委員が出席し、会議を成功させ、この分野での日本の地位を一段と高めることになりました。

(川村正信)

(2) ISO 理事会および執行委員会でのご活躍

日本は1969年以来、ISOの実質的な運営を行う理事会(ISO Council)メンバーとなっていました。石川先生は、1977年から日本工業標準調査会ISO部長として毎年開催されるISO理事会(ジュネーブ、または総会開催国)および3年毎に理事会と同時期に開催されるISO総会(1979年：ジュネーブ、1982年：トロント、1985年：東京、1988年：プラハ)に出席され、精力的にお仕事をされました。理事会出席は、1977年第31回から第42回理事会まで、通算12回のほりです。また1981年には理事会委員会の一つである執行委員会(EXCO: Executive Committee) [1986年より執行評議会 <Executive Board> に組織変更] のメンバーに指名され、以後、組織・予算等ISO全般に関する理事会への助言等、文字どおり、ISOに対する日本の顔として大きく貢献されました。

さらに1985年9月、60カ国の代表および13の国際機関の代表約450名が参加してISO東京総会が開催されましたが、石川先生は総会・理事会等の公式行事への出席はもちろん、ISO東京総会組織委員会副委員長として、基本計画およびタイムスケジュールの審議、実行計画および予算の承認等、準備段階から精力的に参画されました。東京総会が成功裡に終了したのもISO部長また組織委員会副委員長としての石川先生のご尽力によるところが大であります。

石川先生のご逝去に接し、ISO事務総長Dr. L. D. Eicherは直ちにテレックスにより深い哀悼の意と、先生のISOへの数々のご貢献に対し深く感謝する旨を表明しました。

(富山 和)



第13回ISO総会
理事会(1985年、
東京)

ともに歩んだ道

東 秀 彦

工業技術院の設立は1948年8月で、標準部では“工業標準化法案”作成の真っ最中でした。この法案は、日本工業規格(JIS)およびJISマーク表示制度(製造者が行う品質管理にベースをおく認証制度)について規定したもので、翌年1月に成案、国会に提出されました。

ちょうどその頃、日科技連は“統計的品質管理セミナー”の開講準備を進めていて、馬場重徳さんを中心に海外資料からの教材の選定作業が突貫で行われていました。標準部がSQCに関するアメリカ規格、イギリス規格などをもっていましたので、私がこの作業に関係するようになり、これが石川 馨さんとの出会いのきっかけとなりました。

1952年に石川さんを委員長として日科技連の“サンプリング研究会”が発足すると、標準部は鉦工業試験研究補助金制度でこの研究会の活動を応援することとし、当時の東京工業試験所で行われたヒアリングでは、品質管理の立場から、この研究の必要性について私が説明しました。この研究成果は、後に鉄鉦石・マンガン鉦石・石炭のサンプリング方法のJISに採り入れられ、貿易で多大の利益をあげました。

この効果を踏まえた我が国の提案で、ISO/TC 102(鉄鉦石)が設置され、その第1回会議が1963年3月、東京で開かれ、石川さんが議長に選ばれました。石川さんは、このTCの仕事に献身的に努力され、ISO 3081ほか多数の国際規格を完成されました。石川さんは我が国のISO会員団体である日本工業標準調査会のISO部会長として、またISOのEXCO(執行委員会)のメンバーとしても活躍されました。また、国際標準化の分野における先生の業績は極めて多大でありました。標準化を終生の仕事としている私にとって、かけがえのない方でした。心からご冥福をお祈りいたします。 (日本規格協会 顧問)

(3) 太平洋地域標準化会議

従来ヨーロッパ主導で進められていた国際標準化活動に、米国、アジア、オセアニア等、太平洋地域の意向を反映させた真に国際的な標準化を図るため、関係国が意見の交換を行う場を設ける目的で、1973年に太平洋地域標準化会議(Pacific Area Standards Congress : PASC)が組織され、現在もさまざまな活動が行われています。石川先生はISO 部会長になられた1977年以來、IEC 部会長と共にこの会議にほとんど毎回日本代表として出席され、今日のPASC活動の基礎造りに貢献されました。(富山 和)



第11回 Pacific Area Standards Congress (ソウルにて、1986年)

(4) 国際協力事業団集団研修コース

石川先生は、発展途上国における標準化と品質管理の普及にも強い関心を寄せられ、特に次代を担う若者に対して熱い眼差しを注いでおられました。

海外技術協力事業団(OTCA、現 JICA の前身)の委託を受けた日本規格協会が、発展途上国に対し、3カ月間の工業標準化と QC の研修を1968年に開始しました。石川先生は、このコースの企画段階から関与されるとともに、主任講

師として教壇に立たれました。その後、国際協力事業団(JICA)の発足により、1974年から、このコースは、JICAに移管され、その委託により、引き続き日本規格協会が集団研修コース「工業標準化と品質管理」として毎年実施してきました。石川先生は継続して主任講師を担当され、研修員に日本のTQC活動の本質を理解させることに努めてられました。

先生の熱心なご指導と研修員の“QCサークルの父でありTQCの世界的権威Dr. Ishikawa”による講義を受ける機会を得たことの感激から、質問が続出し、先生が一つひとつの質問に丁寧に答えになるため予定時間をオーバーすることも度々でした。時には、補講を行うこともあり、そのために、関係者に先生ご自身で電話をされ、お忙しいスケジュールを調整されたということもありました。

ご講義の終了後、テキストに石川先生直筆のサインを頂いた研修員が、それを大事そうに胸に抱いた光景が思い出されます。

今日、ASEAN諸国を中心として、著しい工業化が展開されており、品質に対する関心も大変高まってきております。このような状況の中で、これらの国々において、このコースを始め、先生の関係されたアジア生産性機構(APO)、国連工業開発機構／海外技術者研修協会(UNIDO/AOTS)等の諸コースの参加者達が活躍している姿を先生がご覧になったら、さだめし喜んでいただけたのではないかと思います。

なお、JICAの本コースは、1989年に22周年を迎え、JICAの規程により、見直しの対象となりましたが、大変好評であるということで、1990年から、先生の教え子である東京理科大学の狩野紀昭教授をプログラム・コーディネータとして、「TQC・標準化活動実践コースII」に名称を変更し、新たなコースとして再出発いたしました。

(富山 和)